

## 赤トンボ

中村 龍介

今年の四月は天候が不順だった。特に、後半には、早くも梅雨入りしたのかと思わせるような連日の雨。晴れたのは、二十三日と三十日の土曜日だけ。後は雨模様で天候が続いた。私の手帳の四月二十三日には「三鷹散策リハ」、三十日には「三鷹散策本番」と書かれていた。だから、この二日だけが晴天となって大いに助かった。

これに先立つ半年ほど前、私は偶然にも三鷹市には、三木露風の墓や露風を偲んで作られた「赤トンボ公園」があると知った。三木露風は、兵庫県の竜野市出身の作詞家だ。明治二十二年に竜野町で生まれ、竜野中学に首席で入学するが、翌年には退学。その後、東京に出て慶応大学、早稲田大学で学ぶ。東京では、若山牧水、北原白秋らと交流、大正三年、二十七歳で栗山なかと結婚、三鷹の牟礼に居を構えた。

露風は三鷹の家に三十六年間居住。昭和三十九年十二月、三鷹の連雀郵便局を出たところをタクシーにはねられ、救急車で病院に運ばれるが、暮の二十九日に死去。享年七十六。

三木露風は、山田耕筰の作曲で多くの詩を書いているが、何と言っても代表作は「赤トンボ」だろう。

夕焼け小焼けの赤トンボ  
負われて見たのは何時の日か♪

十五で姐やは嫁に行き  
お里の便りも絶えはてた♪

露風五歳のとき、両親が離婚して家を出た。露風は祖父に引き取られた。祖父の家では姐やと言われるお手伝いさんに世話をしてもらった。が、その姐やも若くして嫁に行く。

赤トンボの歌詞にある、「負われて見たのは」とは、姐やの背中だ。その姐やは十五で嫁に行き、露風は忽ち孤独の中に突き落とされてしまう。そういう環境が赤トンボの詩を作る原動力になったのだろうと推測できる。

さて、「赤トンボ」を歌う歌手だが、同じ竜野出身の歌手、

多田周子を筆頭に挙げたい。私は「多田周子東京後援会」の理事をしている関係で、彼女の歌う「赤トンボ」を数えきれないほど聴いている。恐らく、多田周子は誰よりもたくさん「赤とんぼ」を歌ってきたものと推測する。

昨年、三鷹の赤トンボ公園や三木露風のお墓を観たときに、この墓石の前で多田周子が「赤トンボ」を歌うと、素晴らしいイベントになりそうだ、と思いついた。それからというもの、この企画をプロモートするために細かい計画を立てた。

協力者として二人の助手を獲得した。一人は、会社時代の仕事仲間で、三鷹生れ、三鷹育ち、未だ現役のF女に道案内をお願いすることにした。もう一人は、ケアマネをしている次女の淳子。肺気腫の持病をもつ私が途中で何かあってはいけないので、私の付き添い役である。

まず、周子さんの土日の都合を幾つか聞き出して、二人の助手の都合とも合わせて、本番のターゲットを四月三十日に定めた。が、当日にぶっつけ本番では危なっかしい。一週間前の四月二十三日をリハーサルと決めて、目的地への道順と所要時間を測ることにした。

四月二十三日が来た。前日まで雨模様だった空が、青空になっていた。家の近くで淳子を拾う。地図を渡して、助手席でナビゲーターと時間の記録係を頼んだ。

車を先ず自由が丘向けて出発した。周子さんのマンションまでの所要時間は二十分と出た。周子さんには、リハーサルのことは伝えていない。本番では、何処で車を待ってもらおうかを決めた。それから、幹線に向かう。三鷹へ行く幹線は環状七号線（環七）と国道二十号線（甲州街道）だ。二十号線を仙川辺で右に降りて、一一四号線を北に進めば三鷹市内に入る。そこから直ぐの右側に、「マツキョー」の大きな駐車場がある。そこで、F女と待ち合わせた。

土曜日、昼前の幹線道路は矢張り混んでいた。出発してから「マツキョー」三鷹新川店まで一時間半ほどかかった。F女にもそれを伝え、助手席に座ってもらい、三鷹市内の案内役をお願いした。淳子は後部座席で、時間の記録係だ。

最初に三木露風のお墓と赤トンボ公園に案内して貰った。露風のお墓はなかなか立派だった。広い敷地のバックには、

もう一カ所、露風邸の今の姿を見学して、その後、近くのファミレス「ロイヤルホスト」で遅めの昼食をとった。一週間後の本番での散策コースを打ち合わせて、赤トンボ公園、露風の霊園、露風邸の玄関をターゲットにすることを決めた。

四月三十日、前日の夜半まで豪雨だったので、半ば諦めていたが、朝を迎えると、早めの五月晴れ。手品ではないのかと思うほど、清々しい初夏の天気になった。

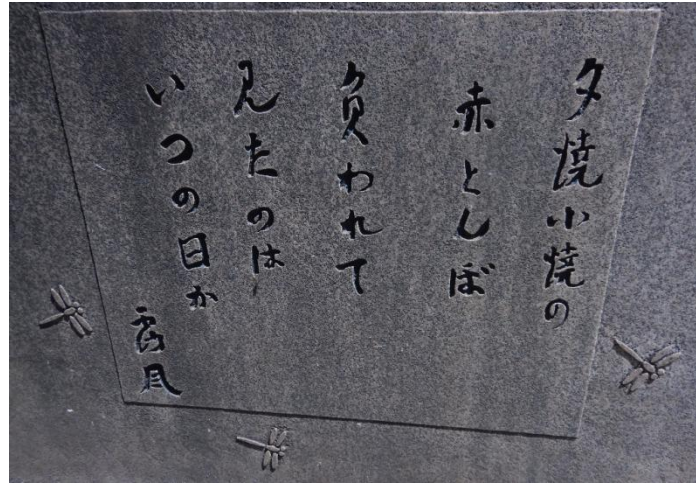
九時半出発。車のオーディオに多田周子の童謡アルバムをかけ、途中、淳子を拾って、約束の十時少し前、マンションの前で待っている周子さんを見つけた。

周子さんは、ブルーのワンピースに、水色のカーディガンを引っかけたカジュアルな出で立ちで、助手席のドアを開けて乗り込んだかと思うと、開口一番、吐いた台詞が面白い。



松の木が植えられ、両サイドには柘植だろうか、短い灌木が左右から墓石を護っている。墓石の前にある左右の花瓶には新鮮な花が生けられ、露風の関係者が墓守をしていることを暗示している。





「あら、趣味のいい音楽がかかっていますね」  
 この一言で淳子も打ちち解けた様子で、スムーズな初対面となった。

三鷹までの一時間で、この日の概略の予定を説明して納得してもらった。三鷹でF女が乗って来ると、女三人の姦しい会話が始まった。私は話を聞きながらハンドルを握っていた。

最初の目的地、「赤トンボ公園」に着いた。普通の公園だが、石に歌の歌詞や赤トンボの絵が刻まれているのが面白い。

周子さんにも珍しいのだろう。自分のカメラを出してきて写真を撮り始めた。

次の目的地は露風の墓地だ。先ず、石碑の前の石を椅子に見たてて小休止。周子さんのセルフタイマー付きのスマホで記念写真。



お喋りが一段落したところで、周子さんが石碑に向かってお祈りを始めた。それが終わりに近づいた時を狙って、私は話しかけた。

「周子さん、石碑の前で『赤トンボ』を歌ってほしい。僕はそれを聴くために、周子さんをここに連れて来たのだから：

「そうね。他に誰もいないからとてもいい雰囲気。私も歌いたくなってきたわ」





墓石の前に立つと、マスクをとって歌い始めた。  
夕焼け小焼けの赤トンボ  
負われて見たのは何時の日か♪

歌手・多田周子のソプラノが  
無人の霊園に流れていった。

これこそが、私が思い描いて  
いたイベントだったのだ。

そう思うと、周子さんの歌声を  
聴きながら思わず感動で

身体中に震えが走ったように  
感じた。

良かった！  
やって良かった！

【二〇二二年六月記・原稿用紙  
十二・五枚（写真アリ）  
七枚半（写真ナシ）課題「石」

### 三木露風先生のお墓にご挨拶

爽やかな萌える緑の風と太陽に包まれたこの日、東京後援会のNさんにお誘い頂き三鷹市にある「赤とんぼ」の作詞者・三木露風先生のお墓参りに伺いました。これまで数えきれないほど「赤とんぼ」を歌って来た歌手として、また、三木露風先生と同郷である歌手として、感謝の気持ちをお伝えし、これからも見守ってくださいと手を合わせて来ました。そして三木露風先生の墓前で「赤とんぼ」を歌って参りました。今年が多田周子ふるさとコンサートが開催されるアクリエひめじの舞台でも歌わせていただきます。とても良い日になりました。Nさんありがとうございました。



【後日談】  
三日後の五月三日、多田周子さんが自分のブログにこの日の出来事を書いた。周子さんにも喜んでもらったようだ。